

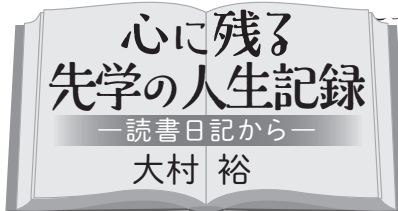
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.189
2019.6.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第10回

藤森栄一『心の灯』(筑摩書房1971年2月)と『考古学とともに』(講談社1970年12月)に描かれた藤森みち子

在野考古学者の藤森栄一(1911~1973年)の生涯については、彼の多くの著作で自ら回想しているので、大方の考古学研究者や考古学ファンには承知のことと思われる。それで本稿では、彼の学問を支えていた妻の藤森みち子に焦点を絞り、その半生を紹介してみたい。

藤森栄一は、いまさら紹介するまでもなく、信州・諏訪が生んだ偉大な在野考古学者にして文筆家である。啓蒙的な考古学関係書籍を大量に世に送り出し、「考古学ファン」を拡大した功労者でもある。かくいう私も、1970年の夏、藤森の『石器と土器の話』を読んで考古学の虜となったのであった。大学卒業後は、定時制高校の図書室の司書として一年間仕事をしていたのだが、この図書室で出会った本が、『考古学とともに』であった。恵まれない環境の中で奮闘する藤森先生の生きざまに接し、教員採用試験に落ちて不遇をかこっていた私は、おおいに勇気づけられたものである。この『考古学とともに』と『心の灯』は戦後と戦前の歩みを各々回顧したものである。この二つの文献を通読すれば、藤森の生涯を一通りトレースできるわけである。若い頃の私はこれを読んで、無条件に感動したものであったが、藤森より多少長生きしている今の私がそれらを読み直すと、彼にはやや無鉄砲な一面があるのではないかと、という印象を受ける。所帯を持ったばかりの頃、考古学研究に夢中になる余り勤め先の大阪鉄工所を長期に欠勤し、挙句の果てに「病氣」になってここを辞めてしまったり(『心の灯』)、不惑を過ぎた頃、日本考古学協会総会の研究発表にエントリーしていながら、その前日に大酒を飲んで二日酔いとなって、発表をキャンセルしてしまったりしたことなど(『考古学とともに』)、首を傾げたくするような行動を繰り返している。恩師森本六爾が遺した東京考古学会の発展的解消に対し、「軽率な判断」をして手を貸してしまったこともあった(『心の灯』)。こうした藤森の奔放な行動に対して理解を示し、時には藤森の失敗の「尻ぬぐい」をして、彼を支え続けた女性が藤森みち子であったのである。

みち子は旧制諏訪中学の校長であった矢ヶ崎輝雄の娘で、夢多き少女であった。結婚する前、藤森には、「将来、満州の女馬賊か女流小説家になりたい」と語っていたそうである。その彼女と藤森が出会ったのは、1938(昭和13)年頃であった。当時藤森は、大阪鉄工所のサラリーマンをしていたが、故郷諏訪地方における後期古墳群の地域的研究を志し、その調査の助手の紹介を母校諏訪中学校校長の矢ヶ崎輝雄に依頼しに行ったのであった。その時矢ヶ崎は、「手のあいてるものはひとりもおらん」とぶっきらぼうに突き放したという。しかし、多分藤森の情熱に感じるところがあったのであろう。しよげかえて校長室を後にする藤森の背後に、「うちのよければ応援させてもいいが」と声をかけてくれたのであった。こうした経緯で藤森の調査に駆けつけてくれたのが矢ヶ崎校長の息女・みち子だったのである(『心の

灯』)。みち子が調査に協力してくれたのは1週間ほどであったが、調査終了後も論文作成のために種々連絡を取り合っているうちに、彼女も考古学に興味を持ち始める。しかしそれからしばらくして、「考古学は私がやるより、あなたがやった方がいいと思う。私はあなたに協力していききたい」と言ってきたというのである(『心の灯』)。

みち子は「中学を卒業しただけの」、おまけに「卒業の成績はびり」であった藤森の、どんなところに惹かれ、生涯を共にする気になったのであろうか。『考古学とともに』によれば、藤森を知ったその時から、「このなにかしら不思議な人生らしいものをもった人と、その周囲、それを愛して担ぎ上げていきたい」と思ったからだというのである。それから「女給・アパートの女管理人、出版・古本屋・紙屑屋・ホンの会計・やどやの女将」を遍歴し、藤森の研究生活を支えて行くのであるが(『考古学とともに』)、それはまさに茨の道を歩むがごとくであった。戦後は戦地から病身となって復員してきた夫を支え、病弱な4人の娘たちの看護をしつつ、家業の切り盛りをしてきたのである。復刻版『かもしかみち』に加えられた藤森のエッセイ(「春愁の暦」)に描かれるみち子の奮闘を読むのはまことにつらい。次から次へと病魔に襲われる娘たち。そして戦地から持ち帰った疥癬・マラリア・寒溶性ジンマシンなどで、のたうち回る夫を同時に看護しつつ、生きるための家業を担っていたのである。次女のヒロミさんが亡くなると、荒れにされる夫に対して、「あなたのは感情の遊戯よ」と言い放ったみち子の言葉は、藤森の心を突き刺す。残った三人の子どもたちを守り、食べてゆくために必死で家業と家事に向き合っていたみち子には、藤森のように大酒を飲んで荒れる暇などなかったのである。しかし、現実に押し潰されそうになっても、夫が考古学研究から撤退することには敢然と反対している。藤森が考古学研究を諦め、蔵書売り払おうとすると、キツとなって「この書齋の本は、私が戦争中、空襲の中をかっつまわり、満員の貨車に積んで疎開してきたもの、アナタなんか、そんなりっぱなことをいう権利なんて、どこを押せば出るの」と突っぱねるのであった。生活のために考古学から離れ、書店のレジスターの前に座る毎日に、生きる気力を失ってしまった藤森は、やがて高血圧の発作で倒れる。みち子は半身不随となった藤森を叱咤してリハビリの訓練を強いる一方、藤森を「考古学に帰す」ために経済力をつけるべく、実家から資金を借りて旅館を居抜きで買い取り、そこの女将に収まったのであった(『考古学とともに』)。

かくて考古学に復帰した藤森は次々に学史に残る仕事を成し遂げ、あまつさえ彼の著書『銅鐸』が毎日出版文化賞を受賞する。その受賞式会場に向かう汽車の中で、みち子はずっと泣き続けていたそうである(同上)。来し方の筆舌に尽くせない苦勞が報われた喜び、そして何よりも愛する夫が世間に認められたことの喜びで胸が一杯であったことだろう。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録 一読書日記から一 (第10回) 大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第182回) 今福拓哉 …3
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえました (第7回) 井川史子 …2	■考古学者の書棚 「海洋考古学入門 方法と実践」 上田健太郎 …4

考古学の履歴書

カナダで米寿をむかえました(第7回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

7. 前期旧石器をもとめて

1960年代の初期に日本考古学界の関心をあつめていたもう一つの問題はいわゆる「前期旧石器」論だった。1949年の発掘で岩宿遺跡のローム層から検出された大型楕円形の石器や、同じ群馬県の権現山で相沢忠洋が採集した大型石器は、当時の文献に「ハンドアックス」(又は訳して「握槌」)と記述されており、アフリカ、ヨーロッパからインド半島にかけて知られているハンドアックスを含む石器群に対比され、旧石器時代のかなり古い部分に位置するだろうという意味合いだった。ところが、岩宿遺跡の発掘以来活気を帯びたローム層の地質学的研究の結果、岩宿第一文化層の大型石器の包含層は南関東の立川ロームの下部にある腐植土からなる第一黒色帯に相当することが明らかになり、その年代は旧石器時代の後期に属することになった。

芹沢長介は1960年版の『石器時代の日本』で岩宿第一文化層の大型楕円形の頁岩製石器は全体が摩滅しており、特にその一個は「先端部が局部磨製の石斧のようにみえるほどひどく摩滅している」とことを記録しているが、「これはおそらく過度の使用によって生じた磨痕であろう」として、これをインドシナにおける沖積世初頭のホアビン文化に見られる局部磨製石斧と関連つけようとするマリンガーの観点に強く反発している。岩宿第一文化層からは石刃や搔器も出土しているから、大型楕円形石器は「おそらく握槌としては最末期の退化形態であろう」というのが芹沢の見解だった。そこで退化以前のハンドアックス／握槌を含む前期旧石器文化の追求となる。

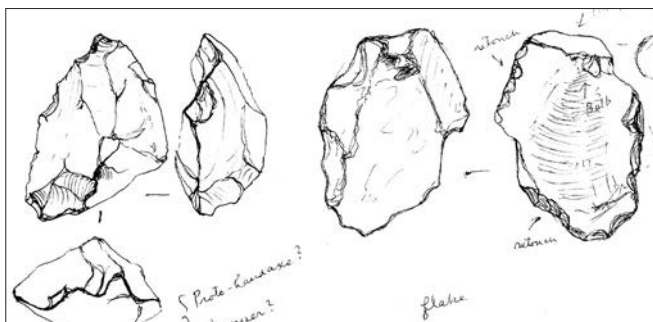
まもなく「やっとのことで日本でも前期旧石器もしくは中期旧石器が出てきました。しかも私がこの手で掘り出したものです」というニュースがとどいた。これは1964年3月8日付の書簡で、1953年以来発掘調査中の大分県早水台遺跡^{そうすだい}で調査の対象となっていた縄文早期押型文の層より下にある安山岩礫層から石英製の石器とおもわれるものが数点摘出されたとのことだ。当時航空使用に使ったペラペラの用紙に芹沢氏がボールペンの手書きで石器数点をスケッチしたのが添えてあった。ここに添付するのはその一部。同じ文書のなかに、1962年以来古代学協会の角田文衛らが調査している、丹生遺跡^に出土の石器に関する批判的なコメントがあり、そして3月末には福井洞穴を掘りますとのこと。その次にいただいたおたよりでは3月20日から4月9日に実施された福井洞穴の第三次発掘で、洞穴の基盤直上(15層)からハンドアックスとフレイクが出土したとを、これも手書きの図を添えてお知らせくださっている。福井洞穴第三次発掘を終えた翌日にまた早水台に戻られたらしく、4月10日-15日の第5次発掘で数百点の石器がえられたとのこと。これについて、芹沢氏は「まちがいになく前期旧石器です」と自信に満ちた表現をしている。

ちょうどこのころ、スペイン、バルセロナの先史学・考古学研究所(Instituto de Prehistoria y Arqueologia)のリポール・ペレロ

(Ripoll Perello)らが1961年に他界された有名な旧石器研究者アンリ・ブルイユ(Henri Breuil)に捧げる論文集を編集しており、私の夫フィリップにも原稿の依頼があった。編集企画によると、2巻にわたる膨大な論集で当時の旧石器考古学の決定版になるような出版物を目指しているらしく、ハーヴァード大学のハラム・モヴィウスやボルドー大学のフランソワ・ボルドーなどのほか、中国から裴文中も寄稿するらしいが、当時まだ国際的に広く知られていなかった日本の旧石器文化はプランにはいっていないようなので、芹沢さんに何か書いていただくようお願いしたらとフィリップが編者に提案したところぜひお願いしてくれるようにと頼まれた。これをお伝えし、もし英語で書くことが面倒で、適当な英訳者がみつからない場合は、私が英訳をお引き受けしてもいいと書きそえた。折り返しのご返事で、「日本から発見された前期旧石器文化」という題目で早水台に関する新しい情報を報告したいとのこと、そして地質に関する部分は当時東北大学助手だった中川久夫氏が共著者として担当されることになった。各地の遺跡調査や発掘品整理でお忙しい芹沢氏から、細切れでとどく原稿を私が英訳してスペインに届けたのがその年の7月、翌1965年秋に出版されたMiscelanea en Homenaje al Abate Henri Breuilの第2巻に図版10枚をつけて所収されている。これとは別に第5次発掘までの成果は東北大学の『日本文化研究所研究報告』第一集として1965年3月に詳しく報告されている。

いっぽう、同じく大分県の丹生遺跡の調査は1962年に開始されて以来、毎年秋に発掘調査がおこなわれ、その都度、調査結果の概報がでており、1968年には調査概報の総括編が刊行された。この方は国際的公表が手早く、ドイツから出ているQuartârの14巻、1962/63年版に佐藤達夫・坂口豊の共著で“The Nyu industry and other Palaeolithic remains in Japan”という短報をだしている。

1960年代のはじめ頃の前期旧石器論の主要対象は早水台と丹生、早水台の問題点は芹沢氏らの言う“石英製石器”は本当に人工品なのかということ、丹生の場合は石製品がヒトによって加工されたものであることはまちがいないが、それらが果たして更新世の古いところにあった包含層に包含されていたものかということ。そこへ新しく加えられた福井15層のハンドアックスとフレイクは人工品であることも、層位がはっきりしていることも問題はなく、しかも共存していた木片は31,900BPより古いという放射性炭素測定値も得られたが、出土品数が少なく、他に類例がないのが難点。そして1965年代後半から70年代にかけて調査が始まった栃木市星野遺跡、その付近の向山、大久保、そして岩宿遺跡の最下層などから出土した石製品について、同様の議論が続いていた。1970年代にはいつて、人工による石器であることにまちがいになく、層位も確かでテフラによる年代もはっきりしている例が仙台を中心とする北日本から次々と報告された。藤村新一による捏造事件のはしりで、2000年11月の発覚にいたる事情はご承知の通り。前期旧石器論のみならず、考古学研究全体に大ショックをあたえた。



▲芹沢長介氏手書きのスケッチ

略歴	
1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在：神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現：奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学科卒業
1953-54年	東京都立大学【現：首都大学東京】社会学研究助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会科学研究所(社会人類学専攻)修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ラドクリフ大学(ハーヴァード大学の女子部【現在ハーヴァード大学に合流】)修士(人類学)
1958年	ラドクリフ大学 博士課程終了(人類学)
1974年	ハーヴァード大学人類学科に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人類学部人類学科 非常勤講師
1967-69年	マギル大学人類学部人類学科 非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人類学部人類学科 専任教員;2009年以来名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

隔月連載です。今回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 182

森原神田川遺跡 ～島根県江津市～

今福 拓哉

『中国太郎』の異名を持つ中国地方最大の河川である江の川は広島県山県郡北広島町に源流をもち、三次市で馬洗川、西城川などと合流し、脊梁山脈となる中国山地を横切って北流する。島根県に至ると県中央部を西に流れ、江津市で日本海に注ぐ。私が紹介する遺跡は島根県江津市松川町に所在する森原神田川遺跡である。江の川の沖積作用により形成された小規模な平野に所在し、四周を江の川と山塊によって囲まれる。江の川の河川改修事業を契機とし、島根県教育委員会が2017年から埋蔵文化財調査を江津市で実施している。森原神田川遺跡は2017年から2018年にかけて発掘調査を実施し、2017年に1区、2018年に2区を発掘した。私は2区の発掘調査に携わった。

1区の調査では中世末から江戸時代前期に開発・営農された水田跡を2面検出し、江の川の自然堤防を開墾・整地し、耕作土を盛ることで構築されるといった大規模な新田開発の様子を確認している。遺跡が所在する江津市松川町は、近世には石見銀山領に属しており、近世前半に全国各地の幕府領で行われた新田開発の実態を検討できる調査例ともなっている。また、水田跡からは畦畔や足跡、犁による水田耕作の痕跡が残されており、当時の農耕の様子や土地利用、農村景観を知る上で貴重な調査例といえる。

2区の調査でも中世から近世にかけての水田跡が検出されると想定していた。しかし、当該時期の遺構としては旧河川や流路が検出されたのみであり、水田跡は確認されていない。ただし、検出した流路には石積みが施されており、流路内の水量を調節するための堰として機能したものと考えられ、1区同様に当該時期の土地利用などを検討する上で貴重な成果を得られた。出土遺物は国産陶磁器とともに輸入陶磁器が多く出土するほか、鉄製品や鉄塊、鉄滓が多量に出土している。鉄製品には未成品や鉄素材と考えられるものが含まれており、鉄器生産が行われていたことも考えられる。周辺には中世の山城や館跡の所在が推定されており、調査地付近に関連する遺跡が存在する可能性が高い。

2区の調査では中近世の農耕・土地利用に関連した遺構のみでなく、古墳時代後期と考えられる大規模な自然流路を確認している。この自然流路は現況の江の川に沿って流れる流

路であり、規模などを踏まえ、少なくとも古墳時代後期までは機能した江の川右岸の自然堤防の一部を検出したものと考えている。この自然流路埋土には土師器(ミニチュア土器、丸底壺、高坏、甗、移動式竈など)や須恵器(大型甕、高坏、坏蓋など)のほか、滑石製勾玉模造品なども出土している。これらの出土遺物には祭祀性の強いものが含まれており、自然堤防上で祭祀行為が行われていたと想定できる。このほかに、縄文土器や弥生土器が出土しており、当該地が古くから利用されていたことも推測できる。

以上のように、森原神田川遺跡の調査では、縄文時代から近世まで連続と続く、江の川自然堤防上での人々の活動の様相を知る貴重な事例を確認した。今年度は発掘調査に従事した責任を果たすため、報告書刊行に向けた整理作業を実施している。

森原神田川遺跡の発掘調査では様々なことを学ばせていただいた。最後にいくつか紹介したい。遺跡名は土地字名をもとにしているが、地元住民の方から「神田川」は江の川の呼称として地域で使用されていたという貴重な情報を得た。字名は土地の利用の方法を示している例が多くあり、字名を確認することで遺跡の有無を推測できることがあることは理解していたが、今回改めて字名の重要性を学んだ。また、発掘現場で土層を検討する際、洪水などの河川堆積を見ることは多くあるが、その堆積の厚さにそれほど留意していなかった。しかし、森原神田川遺跡の発掘調査中に西日本豪雨災害が発生した。岡山県や広島県で多くの爪痕を残した豪雨災害であったが、島根県でも冠水などの被害が発生した。江の川流域では山塊と江の川に囲まれた小規模な平野を形成するという地理的特徴から冠水被害が各地で発生した。森原神田川遺跡の発掘調査箇所も冠水被害が生じ、冠水前の調査体制に戻るまでに1か月ほど費やした。調査区内に流入した30cmほどの土砂の厚さを目の当たりにし、改めて自然災害の恐ろしさを実感した。

森原神田川遺跡の発掘調査では多くのことを遺跡や住民の方々、そして自然から学んだ。発掘調査に携わる人間として通常では得難い経験をしたと思っている。得られた経験・知見を活かし、今後も多くの遺跡に携わり、その責務を果たしていきたい。



▲森原神田川遺跡1区で検出した水田跡(写真提供:島根県埋蔵文化財調査センター)



▲森原神田川遺跡2区で検出した自然堤防(写真提供:島根県埋蔵文化財調査センター)

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは横山瑛一さんです。

考古学者の書棚

「海洋考古学入門 方法と実践」

木村淳・小野林太郎・丸山真史 編著／東海大学出版部(2018) 上田 健太郎

水中考古学といえば真っ先に沈没船の水中調査がイメージとして浮かぶが、個別の沈没船の調査事例の数々に触れる前にまず、より広く、海と人との関わりの観点から水域に存在する遺跡やそれらに対するアプローチ全般について知りたくって本書を手を取った。

そもそも海洋考古学とは、聞き慣れない研究領域である。本書によれば、海洋考古学は人類と海や水環境に関わるすべての事象や歴史を対象とし、水中考古学は方法論の一つであるという。島嶼・沿岸考古学や動物考古学も同様に、海洋考古学を構成する研究領域の柱とされ、本書の目次を眺めると海洋考古学における研究要素のアウトラインをイメージしやすいだろう。

序章

第1部 水中・海事考古学

第1章 水中考古学と海事考古学

第2章 沈没船遺跡とアジア海域史

第3章 史跡沈没船と水中文化遺産の保護

第2部 島嶼・沿岸考古学と民俗考古学

第4章 海から見た人類の進化と歴史

第5章 島嶼と沿岸考古学

第6章 海域アジアにおける海民の過去と現在

第3部 動物考古学

第7章 動物考古学からみた海と人の歴史

第8章 先史時代の奈良盆地における海産物利用

第9章 近世の海産物利用

終章

まず気づくのは、海域(もしくは水中)に属す遺跡のみを対象とするわけではなく、陸上の遺跡からも把握できる海産資源利用の状況証拠や、海を介した交易や戦闘を示す考古資料も海洋考古学の研究領域に含まれるわけである。

冒頭で触れられた日本の水中考古学史では、当初湖底遺跡の研究に端を発したものの特殊な立地環境にある遺跡の発掘調査という認識にとどまり、1970年代以降の開陽丸やいろは丸の水中発掘調査が先駆的な事例となるまで、その特殊性ゆえの考古学への貢献度の高さや可能性に着目されにくかったという。

これは、沈没船の引き揚げがその国の文化・歴史・社会を背景に国家形成やアイデンティティ、ナショナリズムにまで相まって、やがて人類の水辺の環境利用や操船技術から海上交易や海洋覇権にまで幅を広げていった欧米の土壌とは対照的であった。特に、沈没船や積荷をもとに植民地主義下の西洋文化の形成や発展へと寄与する歴史研究から、水中環境に限らず沿岸地域や河川の流域など陸地空間も対象に含めマッケルロイの言うように“海上を舞台にする過去の人間活動、社会経済や政治の変遷や技術革新を総合的に研究する”海事考古学の概念の普及へと発展していることは、考古学への貢献度の可能性をより大きくしている点で印象的である。

つまり、陸上の歴史における縁辺としてではなく、海そのものを舞台とした人間活動の復元を試みるわけだが、例えば交易圏

の形成には小海域ごとの結びつきや交流が背景となる。勤務先の博物館では準構造船を復元して体験乗船日を設けており、大陸から銅鏡や鉄素材を運んだ頃には準構造船、少なくとも遣唐使の頃には構造船で航行したと説明する立場にあることから、造船技術と航海術の進展には関心があった。驚くべきことに、9世紀に東アフリカ産の木材を用いて中東オマーン付近で建造されたと考えられる沈没船が、インドネシア沖海底で発見されている。東南アジア半島部や島嶼部の沿岸港市の成立や耐航性のある船の出現により、交易品が長距離を直接運搬され、ユーラシア東西の海域間の海上輸送が生じたという。我々が陸上の遺跡を調査して出土する玉などのガラス製品や陶磁器などもこの海域どうしを結ぶ人間活動の延長線上にあるのだ。

生業では、沖縄本島のサキタリ洞遺跡の世界最古(2万3千年前)の釣針の発見が記憶に新しいが、東ティモールのジェリマライ遺跡では4万2千年前にも遡りうるマグロ・カツオ属の魚骨が認められ、世界最古のマグロ・カツオ漁の痕跡になるという。6年前に宮城県気仙沼市波怒棄館遺跡では、縄文時代前期後葉の貝塚からマグロの脊椎に石器が刺さったままの状況や筋状の解体痕跡を留めた状況が確認されており、膨大な量のマグロ骨の出土からも解体場が存在したことが指摘されている。マグロは釣り漁やトロリング漁(引き縄漁)が適しており、石斧で丸太をくり抜いて丸木舟をつくる技術にも、丸木舟でマグロ漁に臨む縄文人にも並大抵ではない心意気を想起させられずにはいられない。

海域アジアの島嶼部に住む海民と呼ばれる漁民や海洋交易者は、5千年以上前に南中国沿岸域や台湾、4千年前に東南アジア海域へ、3千3百年前にメラネシアのニューギニア離島域へこの時期にはラピタ人として進出する。彼らは加工用の磨製石斧やブタ、ニワトリ、イヌなどの家畜動物、栽培植物といった新石器文化の要素を伴いつつ海に適応した農耕民であったと考えられている。

また、動物考古学は人間との関わりのある動物遺存体のうちよりその性格を示しやすいものを対象とし、生業や祭祀、時には嗜好や経済状況を垣間見るヒントを与えてくれる。佐賀市東名遺跡では縄文時代早期当時、有明海に面して沿岸表層を回遊するイワシも網で獲れたと同時に、産卵のために河口付近に集まってきたアユの恩恵にも与っている。また、現在の有明海では漁獲されないホンニベやトウカイハマキギも認められる。

以上のように本書は、水中考古学のみにとどまらない海と人間との関わりを広くアプローチする姿勢を紹介している。なお、コラムでは実際の水中遺跡の調査・発掘法も紹介されており、基準点テープメジャーを張った基準線からの潜水調査者の配置による範囲や位置関係の記録、ウォータードレッシジなどの掘削機や防水ノートなどの方眼紙を用いた図面作成、写真やビデオ映像など興味深い。

アルカ通信 No.189

発行日 2019年6月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801
 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp
 URL : http://www.aruka.co.jp